

日本よ覚醒せよ

麗澤大学特別教授・元空将
織田邦男

公の精神取り戻せ

ジャーナリスト
×
櫻井よしこ

——織田さん、このたびは第三十八回「正論大賞」の受賞、おめでとうございます。審査員全員一致での受賞決定でした。

織田 身に余る光栄で、重い荷を背負ったような気がしています。初回から櫻井先生を含めて私の前の第三十七回まで、錚々たる大学教授、文化人、ジャーナリストの方々が受賞されている中で、私はただの元自衛官です。先日、櫻井先生に「私がこんな賞をいただいでいいのでしょうか」と伺いましたら、「後輩の励みになるからもらい

なさい」と言われて吹っ切れました。雲の上の存在だった知的巨人の中での、ただの自衛官OBの受賞です。私が自慢できるとしたら人生の約半分、三十五年間を国防の最前線で過ごし国の守りにあたってきた、唯一それだけです。

アサヒが飲むものであって読むものではないと言われるように、「正論」は読むものであって自分が書くものではないと私は思っていました。私の唯一の存在意義は三十五年間、最前線にいた現場の目線ですから、その目線で見るのは学者・ジ



さくらい・よしこ ハワイ州立大学歴史学部卒業。日本テレビのニュースキャスターを経てフリージャーナリスト。平成19年にシンクタンク「国家基本問題研究所」を設立し理事長。インターネットテレビ「言論テレビ」でキャスターも務める。



おりた・くにお 昭和27年生まれ。防衛大学校を卒業後、航空自衛隊に入り、F-4戦闘機パイロットなどを経て、米スタンフォード大学客員研究員、航空幕僚監部防衛部長、航空支援集団司令官などを歴任した。平成21年、退官。

ジャーナリストの皆さんとは違うかな、と思って令和三年に産経新聞の正論欄執筆メンバーをお引き受けした次第です。それに加えて今回の正論大賞、まさかという思いでしたが光栄なことでした。櫻井 私は「後輩のためにも」と申し上げましたがもう一つ、織田さんの受賞は自衛隊の先輩たちのためでもあると思います。

これまで日本の政治の場における国防の議論がいかにも実のない、非現実的なものであったことか。かつて栗栖弘臣^{くりすひろおみ}統合幕僚会議議長が「いざ外国の奇襲攻撃を受けても総理大臣から防衛出動命令が出るまで動けない、それでは国民を守れない。結果として超法規的な行動をとって守るしかない」と発言した。今、同じ発言をしても何ら問題にはならないでしょうけれど、栗栖さんは当時の金丸信防衛庁長官に罷免されてしまいました。

栗栖さんは革新勢力からは罵詈雑言を浴び、その後に出馬した参院選では落選するなど、後半生を棒に振ってしまったわけです。そうした先輩方の苦しい、悔しい道のりが今まであって、今の日本がある。そこで織田さんが発言されていること

は今後の後輩のためでもありますし、先輩方のご苦勞に応えることでもありましよう。国軍たる自衛隊を担う自衛官の代表として、すばらしい発言をされていると思っています。

織田 ありがとうございます。産経新聞の正論欄に令和三年九月から書き始めて気になるのが、自衛隊OBや後輩たちからの「よくぞ言ってくれた」との言葉です。これは「まだ自分たちは発言できない」ということの裏返しでもあり、複雑な心境になります。今でも、軍や核兵器、安全保障に関しては江藤淳氏が言うところの「閉された言語空間」が厳然としてあって、米国では当たり前

に論じられることが言えないのです。

終戦直後にはたしかに「閉された言語空間」があり、栗栖さんなども相当な苦勞をされました。現在はさすがにその状況はなくなったかと思いきや、意外とそうでもありません。「非核三原則」と聞いたとたんに、何か魔法にかかったかのようにそこから先に一步も進まない状況がまだにあります。岸田文雄総理が「私は被爆地・広島出身だから非核三原則を守る」とおっしゃる。これ

は論理的におかしいでしょう。非核三原則が日本国民を守るために最適な政策だからこれを守る、ということなら納得しますが、果たして他の選択肢を考えた上での結論なのか。そうしたタブーが存在する状況を誰が正していくかといえ、地道に「正論」という場を使わせていただいで主張していくしかありません。

櫻井 この対談記事が出るころには安全保障関連三文書が改定されている見通しですが、そこで大きな役割を果たすはずの有識者会議の議論では、核の問題は全く論じられません。岸田総理が「私は広島出身で、非核三原則を守って…」とおっしゃるのは核の問題から目をそらした全くおかしな議論です。ご指摘のように非核三原則で国と国民が守れるのならともかく、そうではありません。もう一つ、岸田さんは広島のご出身ではありませんが、日本国の総理大臣なのです。そこはきちんと考えていただきたい。

核、というとおどろおどろしいもの、悪い目的のために使われるものと思われがちですが、核が最大の抑止力であることから目をそらしてはなり

ません。核が安全保障に役立つているプラス面を冷静に考える必要があります。

織田 自由闊達な議論をした上で「やはり日本は総合的に考えて非核三原則でいこう」というのならしいのですが、全く議論なしに決められているのが問題なのです。四十年以上前に清水幾太郎さんが著書『日本よ国家たれ―核の選択』で、日本は「被爆国」という特権意識を持っているのではないか、被爆国だからといってどこの国も核攻撃を遠慮したりはしませんよ、と指摘しています。

非核三原則・専守防衛は合理的なのか

織田 そうした、考えれば考えるほどおかしいことが今なお通用している。たとえば「専守防衛」という概念です。専守防衛というのは「相手から武力攻撃を受けたとき初めて防衛力を行使」するということで、ここまでならまだいい。国連憲章の考え方もそうですから。しかしそれに続いて「その防衛力行使の態様も、自衛のための必要最低限度にとどめ、また保持する防衛力も自衛のための必要最低限度のものに限られる」となってい

守る上で、専守防衛という立場を採るならば絶対に戦争を起させないような強力な防衛力を持つ必要がある。誰もそれを言いません。

櫻井 言葉の表面的な解釈に留まって、深く考えていないんですね。こちらから攻撃しないということ、「日本が悪い戦争をした」と反省する国民性の中で専守防衛という言葉がスツと頭の中に入ってきてしまうのでしょうか。けれども、政治家あるいは言論人として説明する責任があったと思うのは、専守防衛は国民が犠牲になるのがまず前提になっているということですか。

織田 必然的に日本の国土が戦場になるということですから。

櫻井 何百人か何千人かの国民が死んで初めて反撃が許されますが、それでよろしいのですね、ご家族や友人の犠牲を前提にして初めて専守防衛という政策が成り立つのです、という説明を本来、しなければなりません。

それから「必要最小限」ですが、自衛隊の皆さんはいつも全力で、各地へ災害派遣に行かれていますことと思います。そこで「必要最小限の災害派

ます。これはおかしい。

わが国の「防衛政策の基本」として専守防衛、軍事大国とならないこと、非核三原則、文民統制の確保を掲げています。専守防衛を認めるとしても、これは国民が犠牲になる・傷つくという前提なのです。そういう前提の政策など政策たり得ない。その前提であれば、絶対に戦争を起させない、絶対に抑止するというのが政府の方針でなければならぬ。すると必然的に、強力な軍事力と巧みな外交が不可欠になる。一方で「軍事大国とならない」とある。他国に対して脅威とならない必要最小限の軍事力で抑止が効くのか。そもそも「専守防衛」と「軍事大国とならない」は矛盾しているのです。

この矛盾した基本政策を政府・防衛省が堂々と掲げていることに誰も文句を言えません。このたび日本が「反撃能力」を持つことが自公両党の間で合意されましたが、それでも専守防衛という言葉があまり中身が考えられないままに飛び交っていました。これはおかしい。国民を何としても

遣をお願いします」と言われたら、どうなのか。必要最小限で国を守ろうとした場合、思いのほか敵が強かったら総崩れになってしまいかねません。災害派遣でも、いったん退散して出直すことにもなりかねない、そういう仕組みなのです。戦後の日本人は想像力の欠如、考える力の劣化で、現実の意味するところを想像できなくなってしまうのでしょう。

織田 専守防衛などの不合理性については、政治家は分かっているながら見ぬふりをしているところがあります。大物議員なども個人的には「必要最小限の対応」なんておかし、とハッキリ言うのですが、公の場になるとウヤムヤになってしまふ。やはり専守防衛という政策は変えていかなければいけません。「専守防衛」と言う名は変えられないのであれば、中身を再定義する必要があります。議論もせず「おかし」と思いながら、見ぬふりをして飲み込んでしまふ。政治が最も慎重なければならぬことです。

「非核三原則」もそうで、核を持ったほうが本当は安全だと思っている国会議員は結構いるはず

ですが、それを口に出して言えない。議論もできない。きちんと自由闊達な議論を重ねなければコンセンサスを得られないと思うのですが、やはり「閉された言語空間」が今なお存在しているように思えてなりません。

櫻井 織田さんの役割は、安倍晋三元総理の役割と似ていると思います。安倍元総理は「台湾有事は日本有事であり、日米同盟の有事でもある」とおっしゃいました。これを聞いて多くの人は「よこぞ言ってくれた」と思ったことでしょう。核共有を含め核の議論もしなければいけない、また防衛費を国内総生産（GDP）比二％に引き上げるべきだともおっしゃった。われわれが認識し議論しなければならぬボールを投げかけられた。織田さんも同じように、自衛隊の現役の方々が気がつきながらも言えなかったことを、世の中の一歩先を見て提言されている、そのことに改めて敬意を表したいと思います。

織田 安倍さんは本当にうまくボールを投げて、波紋を広げられてきたと思います。その点、私は下手にボールを投げるとただの右翼扱いされて無鮮に映っているようなのです。世の中では安全保障についてほとんど論じられていませんが、日本を取り巻く国際情勢は厳しく、学生たちも「日本は本当に大丈夫なのか」と思っている。だから私の講義を、目を輝かせて聞いてくれるのです。そして講義の後、学生がやってきて「私はいざとなったら戦います」と小声で言うのです。

櫻井 それは大きな声で言わないと（笑）。

織田 大きな声では言えないですね。講義の途中でも挙手して「日本は七十九カ国中でビリかも知れないけれど、私は違います！」と言うのが普通ではないかと思うのですが。やはり日本特有の言語空間のいびつさがあるのだと思います。こうしたものを一つ一つ打破していかなければならない、それが防衛の最前線で三十五年間、戦ってきた私の使命なのかなと思っています。

櫻井 私たちは軍事に疎いということもあります。が、そもそも国の存在感が戦後、希薄になっていくという問題があるかと思えます。国のために命を投げ出すという発想が途絶えてしまつて、会社のために頑張るとか、こぢんまりしたところに

視されかねませんから、「正論」でも十分に気をつかつて書くようにしているところですよ。

櫻井 いま、国の統治の基本が経済から軍事へと移っているように思われます。今後、軍事について議論する必要性が高まってくると思いますが、私たち軍事の素人にとって軍事について考えることはなかなか難しい。そこにどんな具体的な問題提起をしてくだされれば、それが考えるための種とも材料ともなります。

国のために尽くすのは幸せなこと

織田 それは元自衛官としての責任と感じています。先日の産経新聞「正論」欄に書いたことですが、国際世論調査で「もし戦争が起こったら、国のために戦いますか」との問いに、「はい」と答えた割合が日本は一三・二％で、調査対象七十九カ国中で断トツ最下位でした。下から二番目だったリトアニアでも三二％あまりでしたから、倍以上の差です。

私はいま、大学で安全保障について教えていますが、学生たちにとって私の話すことは非常に新

人生の意義を見出すようになってしまっている。戦後の日本は、憲法をみても国の果たす役割がありません。国は事実上、何もしなくてもいいんですよと書いてあるのが憲法前文です。国家の土台である軍事はといえば、九条二項で陸海空軍その他の戦力はこれを保持しないとされており、交戦権も認められていない。国は国民を守ることも国際社会におまかせ状態ではない、と命じているのがこの憲法なのです。戦後の国の土台が歪められてしまっているのです。

織田 米国の第三代大統領トマス・ジェファソンは「最大の国防は良く教育された市民である」と言っていますが、日本の場合は真の教育がなされていく。私は自衛隊に三十五年奉職して、それがよく分かりました。

自衛隊での教育とはどのようなものかと、よく聞かれます。私は「公の復活」ですと申し上げています。いま学校教育や一般社会では「私」優先で、国家や社会の大切さが軽視されています。一方、自衛官が最初に制服を着て宣誓するのが「事に臨んでは危険を顧みず」という利他の精神で

す。国民のために全力を尽くし、場合によっては自分の命を投げ出すこともあり得る、ということ。日教組の教育とは真逆です。それで自衛隊に入ってきた若者は目覚めるのです。

日本人は古来の伝統に根差す「利他の精神」というDNAを持っていないはずですが、それが学校教育で封印されている。そのDNAを芽生えさせるわけです。他人のため社会のため国のために尽くすことがこんなに幸せで心地よいものだと分かった瞬間に、隊員の目の輝きが違ってきます。災害派遣に出ていく自衛官の目の輝きを見てください。もちろん、自衛官でも変な人間はいませんが「犯罪白書」によれば自衛官が罪を犯す割合は一般人の十分の一程度に過ぎません。自衛隊の教育が総じてうまくいっているのはなぜかといえば、それまで抑えつけられていた日本人の魂・DNAを目覚めさせているからなのです。

国との約束守った大正生まれの父

櫻井 すばらしいことだと思います。もう少し具体例を紹介いただければ。

生きる、というのは特別なことではなく、日本人として当たり前のことだといえます。伝教大師最澄も「己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり」とおっしゃっている。こういうことを学校教育で教えてもらいたいものですが、これは家庭でもできる教育です。そうした家庭で育てば立派な人間になることでしょう。

防衛大学校の在校生でも「将来、自衛官になる」と固い信念を持っているのはほんの二割程度です。しかし四年間「他人のため国家のために尽くすことはどんなに幸せなことか」と繰り返し教え、それを訓練や実生活を通じて体得した結果として、八割の学生が自衛官に任官します。自衛隊に入ってくるのが特別な人であるわけではなく、自衛隊の教育が超右翼教育なのでもありません。きちんとした社会人を育てる教育を行っているだけなのですが、一般社会ではそれが欠けている、ということではないのだろうと思っています。

櫻井 公の心を取り戻す教育が大事とのこと、その通りだと思います。これは、福沢諭吉が「立国は私なり、公にあらざるなり」と言ったことと対

織田 入隊した隊員は最初に朝夕の国旗掲揚・降下を実践し、そして「事に臨んでは危険を顧みず」と教えられます。実際の活動としても空自の航空救難団のモットーとして「That others may live. (他を生かすために)」という文言があります。が、他の人を生かすべく自分たちは頑張る、という教育をいろいろなところで受けるわけです。私がすばらしいと思ったのは、自衛隊のイラク派遣の際に私が二年八カ月、指揮官を務めたときのことです。私の在任中も含めイラク派遣の五年間で、自衛官の事件は一件だけ、それも自衛官が他の車両にはねられたというものだけでした。不祥事らしい不祥事は一切ありませんでした。

自衛隊がイラクから撤収する際、多国籍軍の指揮官たちとの昼食会があり、そこで「自衛隊には実は軍法も軍法会議もあります」という話をしたら皆、のけぞっていました。それでなぜ不祥事が起きないのか、と問われ、私が「サムライスピリットだ」と答えたら一同、目を白黒させていました。実際のところは日本人が本来もつDNAを芽吹かせた結果だと思っています。他人のために

にして考えねばならないでしょう。自衛隊は公の組織だけでも、その中で一人一人の自衛官が私として自分の命をなげうって任務を達成する、すなわち私の心と公の心とを一体化することが国の永続につながるのだと思います。公は私から成り立っていて、私はまた公によって場を与えられ守られている。そういうことが、昔の人は物語などを通じて家庭教育で教えられてきたはず。例えば『太平記』に出てくる楠木正成は、私を全うして公に尽くし、その生き様を物語として後世に残しました。しかし楠木正成は戦後、教えられなくなり、そういう教育はいま、圧倒的に不足しています。

織田 私の両親は戦中派で、結婚してすぐに広島県で呉空襲に遭って母の嫁入り道具は全部、焼けてしまったと聞いていますが、両親の世代ですと国家と個人の関係が自然に一体化しているんですね。その象徴が靖国神社だと思います。私の父はパイロットだった弟を戦地で失っており、九十歳を過ぎて九段下の駅から杖を突いて坂を登って靖国に参拝していました。父は、靖国神社を毛嫌

いする人たちが何を考えているのか、最後まで理解できなかつたようです。父にとって国家と個人は一体化していたのです。

人間の究極の欲望は、天寿を全うすることだと思っています。その欲望を投げ捨てて国家のために命を捧げた人に対して生きている者が礼を尽くすのは、ごく当然のことでしょう。

父が九十歳になったとき、初めて「実はワシは戦艦大和を造っていた」と聞かされました。父は海軍呉工廠の技官で、戦艦大和の第二砲塔の製造に携わっていたそうですが、なぜ今まで黙っていたのか聞くと「国と約束したからだ。わしももう長くない。もうええじゃろう」と。国と約束したことだから、戦後生まれの私にもずっと言わなかつた、ということだったのです。仰天でした。

櫻井 聞いていて涙が出そうです。

織田 大正生まれの男は、七人に一人が戦死しています。そうした中で生き残った親父たちの世代では、国家と個人が一体化しているのです。海外に行ってみれば、そうした関係が通常であることが分かります。私などはまだ、そうした意識を持

ろん軍人でもありませんでしたが、その母の中でも国家と個人は一体化していました。終戦時にベトナムから、両親は生まれつかりの私と兄を連れて、一文無しになって引き揚げ船に乗って帰ってきました。母が東京・上野に行ってみると、あたり一面は焼け野原だった。後年、母に「そのとき、どんなことを考えたのか」と聞いたのですが、母は「お国はこの先、大丈夫なのだろうかと考えた」と答えたのです。一文無しで満身に住む家もなかつたのに、家族の生活は何とか頑張ればやっていけるが、破壊され尽くした祖国の方を心配したのです。

織田 われわれは戦中派の両親に育てられました。私が防衛大学校に進学するとき、母は「お国に捧げた身だから、頑張りなさい」と言うのです。戦闘機パイロットになったので、本当は心配で仕方なかつたはずですが、それを私には決して言わなかつた。「国のために命を賭けて頑張れ」とは、私などもなかなか息子に対しては言えませんが、近年は、そんなことを言うのは悪だといわんばかりの教育がなされています。「命賭けで頑張

っていた大正生まれの二世ですからいいのです。日本では若い人ほどにそうした公の意識は薄れていきます。国家と個人の関係をしっかり教える教育をしなければ、日本の日本らしさがどんどん消えていってしまう。それが唯一、残っているのが自衛隊だと思います。それにしても、国家に対する思いについて私は自衛隊に入ってから熱い思いを持つているつもりでしたけれども、親父はもっと熱い思い入れがあつたんでしょう。

櫻井 そうした人たちの思いが凝縮されているのが靖国神社だといえますが、その靖国神社がないがしろにされている現状は、非常に恥ずかしいことですね。

織田 国家の恥ですし、精神のメルトダウン（溶解）を引き起こしています。個人と国家が一体となつているからこそ国家が繁栄するわけですし、国家のために尽くした人をきちんと追悼してこそ国家は成り立つものです。そういうことを言うとき「右翼」だとかレッテルを貼られて言論を封殺されそうになります。

櫻井 私の母は明治末年、農村の生まれで、もち

れ」と公に教育できるのは、今や自衛隊だけかもしれない。「国民を守るために、必要最小限に頑張れ」なんてことは言いません。

五十兆円を国防に投じて安上がり

——「必要最小限」に対してそれぞれの命を賭けるなんて、自衛官に対して失礼な話ですね。

織田 安倍晋三元総理は「毅然として、全力を挙げて尖閣を守れ」とおっしゃっていた。日本の防衛の基本政策と矛盾しているような気もしますが、これは基本政策のほうを変えるべきでしょう。皆、この矛盾に気づきながらも黙っている。こういう矛盾を指摘する責務が、私にはあるのかなと思つています。

櫻井 いま、日本ほど危険な状況下に置かれている国はそう多くはないと思われまふ。こうした中で、自衛隊の方々が危険だと感じられている感覚と、論理的に裏付けする軍事の知識、そして世界の国々が軍事力で自国を守ってきたのだという歴史の知識、それらを国民の教養の土台として持たねばならない時代がきていると思うのです。そう

した教養が欠けているので、国会での議論も…。
織田 上滑りしていますね。

櫻井 そこで織田さんが代表する軍人の提言が目に見える形で、政府の各所に届けられなければいけないと思います。現にあるNSC（国家安全保障会議）でも防衛大臣は常に出席していますが、制服組トップの統合幕僚長はなぜ常に出席しないのか。織田さんの提言が、そうした制度も変えていくきっかけになってほしいと思っています。

織田 国際社会は力によって動いているのが現実です。日本人は目をそらしたがりませんが、プーチン露大統領のような力の信奉者は力しか信じません。いま日本は、非常に厳しい環境下に置かれています。何しろ三つの核保有国に囲まれた国なんて、日本だけですから。

櫻井 しかも三つとも独裁国家です。

織田 さらに日本は三つの領土係争を抱えています。この状況の中で安閑としていられるほうが、どうかしています。日本を取り巻く国際情勢は戦後未曾有の危機にあるのだということを、繰り返し訴えていくしかないと思っています。戦争が起

メリカはペロシ下院議長はじめ政治家が次々と訪台し、上院を中心に「台湾政策法」の審議が進められていて米台同盟に近い関係が生まれようとしています。それに比べ、わが国は何をしているのか。蔡総統は福島などからの農産物輸入も国民の反対を押し切って解禁しました。「これでTPPに加盟できる」という期待が、台湾側にはあつたのです。それを受けて日本としては、せめて台湾加盟の是非を検討する作業部会設置の提案くらいすればよかったのに、しなかった。それで蔡総統は国内で「日本にハシゴを外された」とみられてしまったのです。政治的なメッセージを発するのには予算は必要ありません。安倍元総理の「台湾有事は日本有事」発言も、一円もかかっていないのです。政治家も私たち言論人も、先を見通して戦略的なメッセージをどんどん発信していかねば。
織田 おっしゃる通りで、このほど防衛省のシンクタンク・防衛研究所が出した「中国安全保障レポート二〇二三」によれば中国は近年、影響力工作を活発化させています。その目指すところは認知戦であり、台湾が「もうダメだ」と白旗をあげ

きてからでは遅いのです。
櫻井 亡くなった安倍元総理が優れていたのは、少し先の世界を見通しておられたことです。「自由で開かれたインド太平洋構想」も、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）にしてもクアッド（日米豪印の枠組み）にしても、戦略的にボールを投げておられた。先の台湾の統一地方選で、なぜ蔡英文総統の率いる民進党が負けたのか。なぜ台湾の人たちは虎視眈々と台湾を狙っている中国に親和的な国民党に投票したのか、これは日本にとっても教訓となる話です。台湾はいま、中国から集中的にサイバー攻撃を受けています。
織田 年間に十四億回もの攻撃を受けていると報じられています。

櫻井 なのに台湾の人たちには、中国が本当はいかに怖い国かという情報が行き渡っていないのです。蔡英文総統に対する批判ばかりが耳に入ってくる。そうした情報戦に負けた結果が、今回の統一地方選での民進党敗北だと思ふのです。

ここに至るまで、なぜ日本は台湾に向けて戦略的なボールを投げてこなかったのでしょうか。ア

たらその時点でゲームセットなのです。それを習近平総書記は狙っている。そうならないよう日本はどう対処するかといえば、「日米で何かあれば一緒に戦うよ」という姿勢を台湾に見せることです。見せるだけでなく、実際に作戦計画を立てて訓練し、人的交流も行って本当に「見える化」しないといけない。台湾を中国に取られないということが日本の国益ですから、そのためにどうすればよいか、答えは自ずから明らかでしょう。ちょっと先のことを読めばいいのです。

櫻井 そうです。政治家の皆さんには一寸先のことではなく、日本の将来を周辺国の流れの中で見るという目配りを日常的にしていたきたい。

織田 中国におもねってか、一寸先も見えないようにしている人も中にはいますよね。仮にも台湾が認知戦で中国に取られてしまったら、人民解放軍は間違いない台湾に進出してきます。二〇二二年夏、ペロシ訪台に合わせるように中国はあわてて「台湾白書」を二十二年ぶりに出しましたが、以前の台湾白書では「統一した暁にも、台湾は独自の軍隊を持っている。人民解放軍は台湾に進駐し

ない」と明記されてきました。しかし今回の白書ではその記述が消えている。台湾に中国空軍が進駐すれば、半径三百マイルの制空権を中国に握られてしまう。そうなると日本のシーレーンが抑えられて、食料や石油輸入の大部分が止められる可能性もある。そこまで読めるにもかかわらず、多くの政治家も危機意識を持っていません。絶対に台湾を取られないためにどうすればいいか。中国が認知戦を仕掛けてきているのですから、こちらはアンチ認知戦で対抗する必要があります。

櫻井 台湾有事には日本も動く、日米台で連携して対処するのだという構えを見せる必要があります。それは台湾のためだけではありません。

織田 それが日本のためでもあります。

櫻井 そこに日本人は気がつかなければいけません。台湾のためにやってあげているのではなく、日本のためにしているのだということです。

——そう考えてみると、いまの自衛隊に足りないものは何でしょうか。

織田 自衛隊はこれまで十分な予算がない中で身を削ってきただけに、気力だけで仁王立ちしてい

る「弁慶」のようなもので、後方・兵站部分が圧倒的に欠けています。現状の自衛隊はいわば「張り子の虎」状態なのです。

それから自衛隊は今後、「反撃能力」を保持することになりますが、これはミサイルを持っては事足りるわけではありません。米軍とともに、どこを攻撃するか、またミサイル、航空機の役割分担をどうするか、そうした作戦計画立案、調整を担う要員も必要になってきます。「反撃能力」保有が決定されると、今後はこれら具体的施策が求められてきます。

反撃能力は絶対に攻め込まれない、国土を戦場にしないためにも不可欠であり、そのためには金も要員もケチらずにつぎ込まないといけない。具体的施策には、更なる人員と予算が必要になりますが、財務省に「その分、他の部隊の人を減らせ」と言われかねません。既にやせ細った人間に對し、減量せよと言うようなものです。これまでのツケ、つまり後方・兵站を急速に整備しなければならず、同時並行的に反撃能力の整備が必要なのです。

櫻井 安倍元総理も以前「日本には継戦能力がない」とおっしゃっていました。七年八カ月も総理をされた方が公の場でそうおっしゃったことの深刻さを、政府全体で受け止めねばなりません。自衛隊に足りないものは多々ありますが、それは突き詰めれば政治の責任です。政治と軍人との意見交換を常にしっかりと、総理の近くには常に軍人がいるような仕組みをつくる必要があるでしょう。政治家は軍事を知らずして正しい安全保障政策を立てることはできないだけに、政軍関係の充実を図らねばなりません。

織田 ウクライナのゼレンスキー大統領は今でこそ「戦う大統領」ですが、二月二十四日の開戦の十日前までは、すべてを交渉で解決すると表明し、防衛力の強化をサボっていたのです。そういう意味で、彼は決して英雄とは言えません。

ウクライナの教訓に学んで、日本は戦争の抑止にお金をかけるべきでしょう。今後五年間の防衛費総額が妥協の産物で四十三兆円になったと言われていますが、抑止のためなら五年で五十兆円かけても実は安いものです。ウクライナの復興には

一千兆円以上かかると言われています。抑止に効果がある、台湾有事を防げる可能性があるものには全部、お金をつぎ込むくらいのことをやってもいい。二〇二三年には台湾有事が起こるかもしれないと米海軍作戦部長も言っており、プリンケン米國務長官も台湾有事は予想より早いかも知れないと発言しています。いったん戦争が起きてしまえば大変なことになる。

危機を未然に防ぐ者は英雄になれない、と言われますが、国家に英雄はいらないのです。いま批判を浴びてもともかく十分な防衛予算を確保して、結果的に戦争を起こさせないほうがよほど安上がりで安全なのです。

櫻井 ウクライナ戦争を受けて、日本の防衛論議は一気に変わりました。たしかにドイツと比べれば日本の覚醒は遅いけれども、日本は必ず覚醒して、憲法改正もなし遂げる、それをやらないような政治家は選挙で退場いただく、来たる令和五年をそういう年にしていきたいと思っています。

（聞き手 田北真樹子／構成 溝上健良）